

## はじめに 「大和」生還者から父への手紙

あまたの死者の上に成り立つ広島市平和記念公園。十か寺もの伽藍がらんや商店などが軒を連ねた、「原爆以前」の風景との間には大きな断層がある。

この町で新発意しんぱち（寺の後継ぎ）として育った浄土真宗の住職はつぶやいた。「夢の中にも出てくる町並みは、とうてい現実には見いだせない。なにか、見せるためのおざなりな造形の中を歩いているよう」（水原史雄・著『安芸門徒』中国新聞社、一九八〇年）。そう明かしたその僧侶も聞き手の記者も、もういない。高名な建築家の原爆以後の「作品」さえ、初めからあったかのように人は受け止める八十年の長き歲月である。

「原爆資料館（広島平和記念資料館）は修学旅行で見学したきりだな」という人なら今の光景には驚くだろう。欧米人観光客を中心にした長蛇の入場の列を開館前から目にするようになるのだ。二〇一六（平成二十八）年の米大統領バラク・オバマの広島訪問と二〇二三

（令和五）年の先進七か国首脳会議（G7広島サミット）、さらにその翌年の日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）のノーベル平和賞受賞の朗報は確かに影響が大きい。二〇二四（令和六）年度の入館者数は一九五五（昭和三十）年の開館以来、初めて二百万人を超えた。

そこから世界遺産原爆ドームの方向へ数分も歩くと、資料館とは裏腹に人の列などない半地下の建物がある。二〇〇二（平成十四）年に開館した国立広島原爆死没者追悼平和祈念館（以下、追悼平和祈念館）である。原爆死没者の名前と遺影を遺族の申し出によって保存・公開するのが同館の目的の一つであり、二〇二二（令和四）年四月、僕はここに父佐田尾歳雄を登録した。その十一年も前に八十三歳で永遠に旅立ったのだから怠慢のそしりは免れない。それでも一人の無名の被爆者を「公」の記録に残す意味はきつとある。友人や知人を案内してディスプレイに在りし日の父を呼び出すと「お父さんの方がイケメンだね」などと他愛のない反応の方が多いが、むしろ気にしない。

父は一九二七（昭和二）年に島根県簸川郡檜山村（現在は出雲市）の農家に生まれた。宍道湖と日本海に挟まれた島根半島の山奥。根拠は不明だが、わしらは尼子（戦国時代の中国路の覇者）の流れだけんのう、と父は口にしていた。だから僕も謀略を用いて尼子を

滅ぼした「毛利」の二文字には血が騒ぐ——。というのは冗談だが、売り出し中の広島の小説家稲田幸久が「駆ける 少年騎馬遊撃隊」シリーズ（角川春樹事務所）で尼子の興亡を生き生きと描いているのは正直うれしい。稲田の講演会でサインをもらい「一日に原稿用紙十枚書けば四十日で四百枚になるはずです」という彼の言に発奮し、この本の書き下ろしに一年余り取り組んできたことをまず明かそう。

父が生まれ育った本家の土間には大きな鋸が掛けてあった記憶があり、木挽きなど山仕事をなりわいにしてきたのだろう。キセルを吸う祖父は炭焼きをしていたことも思い出す。大学の頃、「博物館学芸員補実習」のレポートに「山の神」をめぐる伝承を父の語りに基づいてまとめたところ、後に高名な民俗学者だと知る平山敏治郎から珍しいことに「優」の評価をもらったこともある。

この辺りは出雲北山山系と呼ぶ急峻な土地柄。海沿いを一気に抜けるような道はなく、同じ山陰海岸でも鳥取砂丘とはまるで違う。岡本雅享・著『出雲を原郷とする人たち』（藤原書店、二〇一六年）の知見を借りれば、島根半島は縄文時代には大きな島であり、現在の出雲平野は人が行き交う海峡あるいは水道だった。

父の郷里から西に行くと十六島という難読地名が見つかる。「うっぷるい」と読む。岩

ノリの産地で、備北（広島県北部）辺りまで商われ、行商先ではノリそのものが「ウップルイ」「オップリ」などと呼ばれたという。さらに西に行けば、「黄泉よみの入り口」と伝えられる猪目洞窟いのめ、絶景の出雲日御碕灯台ひのみさきと続き、岬を回り込んで出雲大社に至る。岡本太郎は「伊勢神宮は」南の風が明るく吹きとおってゆくような感じなのに、出雲は重くとざしている。どつしりと地上に突き立って、何ものも近づけないいかめしさがある」（『日本再発見 芸術風土記』新潮社、一九五八年）と言いきったが、いわば地の果てに構えた「国つ神」の塔だろうか。そのような土地からいって父は軍港呉くれの一水兵となり、後世まで人類史に刻まれるであろう、ヒロシマの惨事に遭遇した――。

三男坊の父は戦後、郷里から宍道湖と斐伊川ひいにほど近い平田町（現在は出雲市）に移り住んで建築業を営み、職業訓練学校の開設に一役買い、神戸市生まれの母澄江との間に一男二女をもうけた。だから僕は山仕事も畑仕事もほとんどしたことがない。

城下町松江と出雲大社の間にある平田という町の知名度は低くても「木綿街道」の名はご存じかもしれない。近年テレビの旅番組を見ていると、出雲大社の次に木綿街道が紹介されたので驚いた。小学生の頃、今は廃業した酒造会社に級友がいて蔵で遊んだものだが、さびれていた古い街並みが志ある人たちの手で生まれ変わったのは感慨深い。

僕の実家では、夕刻になると上りかまちに左官職人や弟子の大工職人たちが座り込んで、お酒やお茶でくつろいでいた。僕が今も晩酌を欠かさないのは、どう考えてもそうした大人たちの影響に違いない。父が好きだった酒の肴はイカやアゴ（トビウオ）やマンサク（シイラ）の刺し身、時にフナの刺し身。僕も食べなれていた。だが、子ども心に両親の会話を漏れ聞くと、常に取引先の材木店に支払いを待ってもらっていたようで、借財も残さなかった代わりに資産も残さなかった。その父が一冊のファイルを残していた。背表紙には「被爆関係書類綴」とあった。

父が入市被爆者であることはもちろん知っていた。軍隊の話もたまに聞いた。嫌な上官の飯にわざとフケを落とす、などといった与太話が多かったが、軍歌を歌うのは聞いたことがない。被爆者であるにもかかわらず被爆者健康手帳（以下、手帳）を持っていないことを中国新聞の記者になってから気付き、広島市政担当だった一九九〇（平成二）年に原爆被害者相談員の竹内武に手続きについて尋ねたことがある。竹内は「被爆証人捜し」の依頼を受け、当時よく市政記者クラブでレクチャーをしていた人である。

竹内に関する古い新聞記事の切り抜きが手元にある。被爆した人が手帳を取得するには原則として二人以上の証人が必要だが、歳月がたつとなかなか見つからない。そこで一九

七二（昭和四十七）年に広島県被団協（理事長森滝市郎）は証人捜しに取り組むことを決め、事務局にいた竹内が任された。広島県内でも被爆した後に帰郷した人、他県から救援に入った人はとりわけ証人捜しが難しい。当初は資料がないため軍人なら戦友会名簿、学徒なら在学名簿や卒業名簿をもとに情報を集め、公刊資料の『広島原爆戦災誌』（全五巻、広島市・編、一九七一年）も読み込んだという。そのうち相談に対し「どこに、どういう人がおつてよ」と言えるようになった。自身も十七歳の時に学徒動員先の己斐（こい）（現在は広島市西区）の郵便局で被爆していて被爆者の複雑な心境もよく知る人だった。

僕が竹内に初めて相談した時、「海軍なら名簿があるから大丈夫じゃろ」と言ってくれたことを覚えている。彼の尽力もあって父は手帳を取ることができたのだろう。だが、なぜ、どのようにして父は被爆したのか。遺された綴の中の「申述書」などを読むまでは詳細を知ることとはなかった。灯台下暗し、広島の新聞記者としてはまことにうかつだったのだ。

綴には「息子さんより貴殿の被爆者健康手帳交付申請について相談を受けました」と記した竹内から父への便りがあった。話を聞いて直ちに対応してくれたのである。

八杉康夫という人からの手紙も何通かあった。父と同じ年に広島県福山市に生まれ、戦

艦大和の測的手として艦橋<sup>ブリッジ</sup>に陣取り、沖縄特攻作戦に向かう。大和沈没後は重油の海を四時間漂流し、駆逐艦雪風<sup>ゆきかぜ</sup>に救助された。戦艦大和の生き残りだが、その人がなぜ、大和乗組員でもない父と関わりがあったのか。当初はそれも大きな疑問だった。まず八杉からの手紙を読んでみた。一九九八（平成十）年頃のものだろう。全文を引いてみる。

佐田尾歳雄様

呉鎮守府23特別陸戦隊

原爆被害者の会「川原石会」

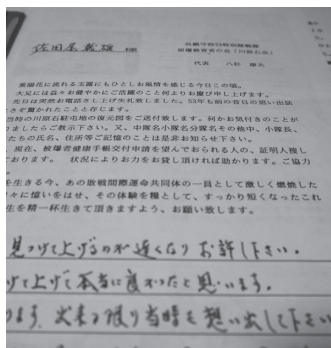
代表 八杉康夫

紫陽花に流れる玉露にもひとしお風情を感じる今日この頃。

大兄には益々お健やかにご活躍のこと何よりお慶び申し上げます。

先日は突然お電話さし上げ失礼致しました。53年も前の昔日の思い出話にさぞ驚かれたことと存じます。

当時の川原石駐屯地の復元図をご送付致します。何かお気付きのことが有りました



八杉康夫から著者の父への手紙 (著者 蔵)

らご教示下さい。又、中隊名小隊名分隊名その他中、小隊長、隊員たちの氏名、住所等ご記憶のことは是非お知らせ下さい。

尚、現在、被爆者健康手帳交付申請を望んでおられる人の、証明<sup>マ</sup>人捜<sup>マ</sup>しもしております。状況によりお力をお貸し頂ければ助かります。ご協力下さい。

老域<sup>おも</sup>を生きる今、あの敗戦間際運命共同体の一員として激しく燃焼した青春の日々に憶い<sup>おも</sup>をはせ、その体験を糧として、すっかり短くなったこれからの人生を精一杯生きて頂きますよう、お願い致します。

(見つけて上げるのが遅くなりお許し下さい。  
でも見つけて上げて本当に良かったと思います。  
資料送ります。出来る限り当時を想い<sup>おも</sup>出して下さい。不審がられると困るので、私のプロフィール同封します。)

この「川原石会」とは呉鎮守府特別陸戦隊第二十三大隊(以下、二十三大隊)の戦友会を指す。呉市川



原石地区は前面に呉湾を望み、後ろには小高く急峻な丘陵を背負う地域で、JR呉線呉駅の隣に川原石という駅もある。二十三大隊は川原石の山中、現在の北塩屋町きんしおやちように駐屯していた。今日では「川原石部隊」で通じることもある。

手紙の本文はタイプ打ちで、宛名と最後のかっこ内が青い万年筆による手書きである。「見つけて上げるのが遅くなりお許し下さい」の一節が強く印象に残った。

そして二〇一五（平成二十七）年の一月、僕は福山市野上町の自宅に初めて八杉を訪ねる。本業は調律師。大和の「語り部」も長く続けるだけに世慣れた人だった。沈んだ大和から生還した話に続き、呉で陸戦隊の新兵たちと過ごした日々を語ってくれたが、文字通り一期一会になろうとは思いもなかった。

出会いからちょうど五年後の二〇二〇（令和二年）一月に訃報を聞く。僕はほどなく「八杉康夫さんと『川原石』」と題する次のようなコラムを同月十八日付の「中国新聞」に載せた。

沈みゆく戦艦大和から生還し、さらに入市被爆した前半生を語り続けた、福山市の八杉康夫さんの訃報を聞いた。92歳。筆者の手元には、八杉さんが筆者の亡き父に宛

てて「被爆の証人を見つけてあげるのが遅くなって申し訳ない」とつぶった太い万年筆の手紙がある。父が被爆者健康手帳を取得する際、随分手を尽くしてもらったのだ。20年余り前の日付である。

大和の沖繩特攻を身をもって知る人として知られた人だが、終戦は呉市で迎えている。呉鎮守府特別陸戦隊23大隊という秘匿部隊に配属されていた。敗色濃い中、乗れる艦船はない。海軍水兵長に進級しながらも、海と関係のない「本土決戦」のこの部隊に回された。大和沈没は固く口止めされたままだった。

陸戦隊といっても、部下は筆者の父のような田舎からぼっと出の少年たちばかりである。「やってきた連中は銃の撃ち方も手旗信号も何も知らない素人部隊」と、八杉さんは著書で述べている。呉市川原石の山中に天幕を張って「肉迫攻撃」の訓練をしたようだが「絶望的な訓練」だったとも振り返っている。

やがて部隊は本土決戦に臨むことなく原爆投下直後の広島市内に入れと命じられる。筆者の父も広島駅の復旧に従事して被爆した。八杉さんもまた被爆し、記録の少ない部隊の全容を戦後も追い続ける。現実を知らぬまま兵隊になったかつての新兵たちに被爆者健康手帳を取ってもらいたい、という思いが、父への手紙から伝わってくる。

「残照の川原石」という証言集を、八杉さんは残した。23大隊を知る数少ない手掛かりだろう。筆者が記事で取り上げたところ、ネット検索で知った教育系の大学から教材に使いたい旨の依頼もあった。昨年のことである。八杉さんに再会して伝えたいと思っていたが、もうかなわない。

戦争とは一国の外交の失敗であり、内政の破綻の結末でもあろう。戦争によって国民の怒りの矛先を外に向けていく。局面では勝ちを収めても、身の丈に合わないことは長くは続かない。先の戦争で日本はそうして追い込まれ、戦争の指導者たちは沖縄を「捨て石」にし、さらに「本土決戦」なるものを呼号してついに全てが終わった。

八十年前、二十三大隊―川原石部隊はこの「本土決戦」に備えて呉の山中に立てこもり、地雷や爆雷を抱えて戦車に突っ込む訓練にいそしんだ。やがて陸戦隊として敵を迎え撃つのではなく、工兵隊のように焼き尽くされた広島の復旧と同胞の救援に向かう。そうした父たちの衝撃の日々を後世に伝える――。これが本書を書き下ろした、まず一つの目的である。彼らにとって人生のほんの一コマだが、忘れられない日々だったはずだ。

この二十三大隊がほとんど世に知られていないこと、公的な記録に乏しいことにもじく

じたる思いがある。遺された貴重な証言を公刊資料などと重ね合わせ、乗るフネを失った水兵たちの「一九四五年の夏」をドキュメンタリーとして再構成したつもりである。

もう一つ、目的がある。書名を『陸戦隊と暁部隊』としたように、暁部隊すなわち広島市・宇品うじな（現在は広島市南区）に司令部を置いた陸軍船舶部隊が、やはり焦土の広島へ復旧と救援に入ったことを後世に伝えることである。

三度の転勤を挟みながら、広島に住んではや四十五年になる僕は遠来の客人をよく広島湾岸の宇品に案内する。旧陸軍栈橋から船舶司令部「凱旋館がいせんかん」跡の碑や「空も港も夜ははれて」で始まる唱歌「港」の碑をめぐる。広島には暁部隊の資料館や記念館はなく遺構もひっそりたたずむだけであり、それにもじくじたる思いがある。

本書では暁部隊の中でも陸軍特別幹部候補生隊（船舶特幹）出身のかつての少年たちの証言を多用している。彼らもまた「本土決戦」の名のもとに水上特攻艇「マルレ」の要員として駆り出され、一期生は沖縄やフィリピンで多数が戦死。二期生、三期生は九州などに配備されたり、焦土の広島へ救援に入ったりした。

僕は二〇〇六（平成十八）年頃からマルレで出撃寸前だった人たちへの取材を続け、父を見送った二〇一一（平成二十三）年に「マルレを焼いた日 少年兵たちの『本土決戦』」

と題して「中国新聞」に連載した。また客員編集委員となった二〇二二（令和四）年の連載「暁部隊と私」を通じ、百歳前後で被爆の証<sup>あかし</sup>である手帳を取得した二人に出会うこともできた。

本書では第五章以降のテーマを暁部隊としたが、その全体像を解き明かす力など到底ないうえ、被爆直後の陸海軍の動静については『広島原爆戦災誌』（前掲）以降も調査・研究が進み、いまだに議論の余地があると聞く。すでに優れたノンフィクションやテレビ番組も世に出ているため、登場する人々にまつわる幾つかの物語として読んでほしい。

「マルレを焼いた日」の取材では八十代半ばの人たちの証言を対面でつぶさに聞くことができたし、一人ひとりの人となりも伝わってきた。取材が呼び水になってマルレの同じ戦隊の五人がリーガロイヤルホテル広島（広島市中区）の中国料理店に集い、僕もお相伴した。かつて陸軍中国軍管区司令部が陣取った広島城と青い空をバックに記念写真も撮った。だが、ほどなく呼びかけた人の訃報が夫人から届き、その後は自宅に何度か電話してもつながらない。その人の船舶特幹の修業証書などがネットオークションに出品されているのを知って、寂しくもなった。戦争体験を聞くことは「時間との闘い」なのだとあらためて思い知らされた。

ノンフィクション作家保阪正康は二〇二五（令和七）年の年頭に、「同時代史」から「歴史」への移行を前提に戦争を解釈すべきだと提唱した。「僕はこんな事実があるという話を掘り起こしてきました。それは同時代の感情にまみれている。歴史的解釈というのは、そうした情を削りながら考えることなんです」（『中国新聞』二〇二五年一月一日付特集面）と述べている。それは戦争や原爆を自らの体験として語る人がいなくなる時代に入るという指摘でもあろう。ならば新たな手掛かりを模索したい。悲観してはいない。

本書の主人公は高名な司令官や参謀たちではなく、戦果を誇る人たちでもないことをお断りしておく。「最後の陸戦隊」あるいは「最後の暁部隊」として歴史に刻まれることを願って書き下ろしている。また、父祖の足跡を追う遺族の人たちは「おのれが生きるよりどころ」を探し求めているのだらうと解釈している。その熱意を無理やり「反核」「反戦」に結び付けないことにしている。

ちなみに僕の父の言う「フケ飯」<sup>ふくりゆう</sup>の話を手記に残している人がいることに気付いた。海軍の伏龍<sup>ふくりゆう</sup>特攻隊員だった門奈鷹一郎<sup>もんなたいちろう</sup>が著書『海軍「伏龍」特攻隊』（新装解説版、光人社NF文庫、二〇二二年）で「フケ飯とは、文字通り頭のフケを飯にふりかけて食わせる、ま

もに抵抗する手だてをもたない、軍隊社会の下級者が「の」上級者に対する報復の手段なのである」と述べている。つるはしの柄などでお尻をひっぱたく「バッター」の制裁を受けた兵隊たちが上官に仕返ししようと画策したが、なぜか見抜かれたという逸話である。伏龍特攻隊については第一章で触れることになる。